
デンエル、出口は西側にて

波ヶ魅 耕斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デンエル、出口は西側にて

【Nコード】

N8938T

【作者名】

波ヶ魅 耕斗

【あらすじ】

天使と悪魔を見ました、出口は西側にあります

祖母が書いた小説を読み進めて行くと、その小説に書いてある事件が現実になる

そんな不思議な小説を手にいれてしまい、刑事の引退を決意していた吉川は次々と事件に巻き込まれていく

1、髪切り蟲

下唇を血が出るほど噛み締め
恵は洗面所へかけ込んだ。

初めて恋人を殺そうと思った…

恋人である隆之は暴力が激しかった。

恵はいつも八つ当たりされた。

何度も逃げようと、別れようと思った

それが出来ないのは愛していたからだと思う

どれだけ暴力をふるわれようが、堪えてきた

それが愛情の裏返しだと信じて疑わなかったから

だが、今回は違う。

7時

仕事から帰って来るや、隆之は不機嫌な表情だった。

「お、おかえり」

自分が緊張している事に恵はすぐに気付いた

隆之は無言でリビングまで行き、ソファーに座った

恵はいつも以上に優しく、慎重に隆之に話しかけた。

「どうしたの？」

隆之は何も喋らない

テレビにうつるお笑い番組をただ静かに見ている

「今日、隆之が好きなシチュー作ったんだよ！！一緒に食べよう」
笑顔で恵が言うと、隆之はポツリと「酒」と言った。

恵はその言葉の通り冷えたビールを隆之に渡し、台所へ行き、ため息をついた。

隆之に酒を渡すとよくない。

だが、今日の隆之の機嫌はそれ以上によくない。

酔って殴られるのを覚悟で、恵は2人分のシチューを皿に盛り、隆之の待つ隣部屋まで持っていった。

しばらく2人は何も喋らずシチューを食べた

部屋にはお笑い番組の笑い声と2人のシチューをすする音、そして、隆之がビールの缶を開ける音だけがあった

5本ほど缶を空にしたところで、隆之が喋った

「今日さ、先輩のミス俺のせいにされてさ…その後、部長に怒られるし、本当、腹立った…」

イライラしているオーラが恵にも伝わってきた

「そう…酷い先輩だね、隆之は何も悪くないのに」

これが隆之の嘘だという事くらいわかっている。

実際はそんな話ではないはずだ。

隆之は物事を大袈裟に話す癖がある

自分が被害者だと、相手に思わせたいらしい。

だが、嘘だとわかったところで、恵にはどうする事も出来ない

恵は絶対に、隆之の味方

そうでなくては殴られる

顔や体に傷がつくのは嫌だ。

隆之の表情を伺いながら、慎重に、慎重に恵は返事をした
まるでホステスの接客のように

「ストレス溜まって、俺死んじゃうかも」
真っ赤な顔で言う隆之

「ストレス発散したいなあ」

その言葉に恵の体は固まった

この言葉は隆之が暴力をふるう時に必ず発する言葉だから。黙って下を向く恵

「その、鬱陶しい髪切ろうか…もうすぐ夏だし暑いでしょ!!」
無邪気な子供のように隆之はニコニコしながら近くに置いていたハサミを握った。

「髪はダメ!!この髪だけは切らないで!!体ならいくら傷つけても良いから、お願い!!」

さっきも言ったが、本当は体に傷がつくのは嫌だ。
だが、髪を切られるくらいなら…

土下座をし、目に涙を浮かべながら恵は隆之に頼んだ。

10年もの歳月をかけ、必死に伸ばしてきた髪
艶やかで、柔らかな、髪は恵の自慢だった。

誰も見とれた髪

両親も、親友も、友達も、上司も、同僚も、取引先の人でさえ、恵の髪を褒めた。

隆之も髪を褒めてくれた。

思えば、それだけしか自慢がなかった。

顔はいたって平凡、勉強やスポーツに優れているわけでもない。
ただ、「髪、綺麗だね」と、話しかけてくれる人は後をたたなかった。

そこから、話が始まり、恵の性格をしり

髪のおかげで親友までできた。

恵にとって、この髪は命同然なのだ
だから、この髪はどうしても切りたくない

「前から思ってたんだよね、その髪邪魔だな…ってさ」

「なんで！？隆之褒めてくれてたじゃん！！綺麗だっって言ってたじゃん！！」

恵が泣きながら言う

隆之は相変わらずニコニコしている

「夏だしさ、切らないと…それにさ、汚いじゃんか。そんな長い髪」

汚い……

リピートされる隆之の言葉。

違う……

綺麗な髪だ

唯一の自慢だ

恵は唇を噛み締め、もう一度頭を下げる

「お願い…します」

目を閉じた

それと同時に

ゴツンと鈍い音をたてて

恵のオデコに鈍い痛みがはしった

嫌な予感がした

隆之が足で恵の頭を踏みつけていた

必死に起き上がろうとする恵の腹を容赦なく隆之は蹴りあげた。

むせながらその場に転がる恵に隆之は馬乗りになり、上から拳をふりおろした。

恵は少しだけ意識を手放した。

恵が目を覚ました。

ジヨキジヨキとえげつない音をたてて、ハサミが動くのがわかった。その状況を理解した時にはもう遅かった

鏡に写る恵の髪は、耳が見えるほど切られていた

肩に残っていた

あの長い黒髪が洗面所に落ちる

男より短くなった髪

髪に映る自分はまるで自分でないようだ

「もう、我慢の限界」

ボソツと自分だけに聞こえる声で呟く

殺そうと思った

だが、殺し方がわからない。

包丁、いや、どこに刺せばいいかわからない？

毒、いや、入手方法がわからない

ガソリンを撒いて…、いや、それでは他人まで迷惑がかかる

睡眠薬、

動脈、

覚醒剤、

農薬

考えれば考えるほどわからなくなる

「アイツを殺す方法…アイツに復讐する方法…!!」

「うあああああっー」

叫び声をあげ

ガンツと

恵は力強く鏡を殴った

その瞬間

目の前が真っ暗になった

目を開けると

知らない部屋に来ていた

全く見覚えの無い真っ黒な部屋

明かりはぼんやりとした間接照明しかない。

暗がりに目が慣れてくるとベットが見えた

真っ黒なシーツの上に真っ赤な薔薇の花びらが無数に散らばっている

よく見れば薔薇の花びらは床にも沢山散らばっていた。

「ここは…?」

恵は辺りを見回す

「ねえ、一緒に殺してあげようか?」

後ろから聞こえた声に恵は悲鳴をあげた

そこには、少し長めの黒髪をツンツンと立てた中性的な顔立ちの少女が立っていた

もしかすると少年かもしれない、見た目では見分けがつかないが、声は女の声だ。

背は低く、150センチと少しくらい。目の色は右目が白、左目は黒服も黒く気味が悪い
まるで悪魔のようなその少年はニタニタと恵を見て笑っていた

「何ビクビクしてるの?」

悪魔が聞く

恵は喋らない…いや、喋れない

こんな知らないところに突然来てしまい恵はパニック状態だった。

『こら！なんて口の聞き方だ。お客さまに失礼だろう！！』

恵が戸惑っていると、天井から声が聞こえた

少し高めの心地よい青年のような声だった

「そうよ、せつかくのお客さまなんだから」

次に左から真っ白の服を着た女性が現れた。

その人は白いヒールを履いて、髪は金に近く、長く綺麗なストレー
ト、真っ白なワンピースに真っ白な上着を着ていた
背は高く、体の細い綺麗な女性だった

その人はまるで天使のように笑う柔らかな女性だった

あまりの美しさに恵は天使を見つめた。

「すみません、お客さま。あの子はまだ幼く、敬語を知らないもの
で…許してくださいね」

と、天使は恵にまた優しく笑いかけ、おっとりとした口調で告げた

恵の後ろで悪魔が舌打ちをした

ようやく悪魔以外の人に会った恵はすかさず天使に質問した
ようやくまともに話せる人が現れたと思ったからだ。

「あのー！ここはどこですか？私なんでこんな所にいるんですか？」

恵が問うと、天使はビックリしたように目を見開き、後ろにいる悪魔と顔を見合わせた。

『何も知らずにここに来たんですかー！』

天の声も困惑したように言った

「はい、鏡を殴ったらいきなりここに来て…」

恵はここに来た経緯を詳しく話した

恵の話聞き終わると天使は困ったように苦笑いを浮かべて

「ここは紹介された方しか来れないはずなんですよ」と言った

「でもさ、来ちゃったんだから、仕方ないじゃん」

語尾を伸ばしながら

幼い子供の用なしやべり方で悪魔は恵の腰に抱きついた

恵は突然の事に悲鳴をあげた

「くらー！！デンー！！いい加減にきなさい」

どうやら悪魔の名前はデンと言っらしい

デンは恵の腰から離れ

天使に向かって話をはじめ。

「僕は、この人がなんでここに来たかは置いといて、この人が殺したいほど恨みがあるなら協力してあげればいいと思うよ。だってこは恨みがある人が来るんだよ」

ニコニコしながらデンは

天使に話かける

「突然何言ってるの！！ここは紹介制なのよ、私は恨みだけで人を裁きたくない。」

天使が声をあげて言った。

「エルはいつも良い子ちゃんで、ぶりっ子だよね」

どうやら天使はエルと言っらしい

その言葉にエルが反撃

その言葉にデンが反撃

売り言葉に買い言葉で

恵を挟んで天使と悪魔は言い争った

『やめろ！！デル、エル。お客さまの前で何やってるんだ』

天の声の一喝で

2人は静まった。

『お客さまへの説明だつてまだじゃないか、勝手に連れてきてしまったんだ。きちんとしなきゃダメだ。それに、夜が明けたらどうするんだ』

天の声の言葉にデンとエルは顔を見合せた

「あの、恵さん」

エルが話かける

「はい」

と恵

「あの…彼氏さんをどれだけ恨んでますか？」

エルは天使の笑顔で恵にたずねた。

恵の脳裏に忘れかけていた怒りが込み上げた

命と同じくらい大切だった髪を、お金をかけてきたあの髪を容易く隆之は切った

それも外に出られないほど短く

恵はまた唇を噛み締めた。

「あら、そんなに唇を噛まないで、綺麗な顔が歪になっちゃう」

と、言いながらエルは恵の下唇に触れるだけのキスをした。

恵は驚きエルから離れた

「大丈夫ですよ、髪ならまた伸ばせば良いじゃない」

エルは相変わらず天使の笑みをうかべながら恵に言った。

まるでさっきの口付けなどなかったようにエルは平然としている

恵も冷静さを取り戻しエルの言葉を考えた。

それも、そうかもしれない。

髪なら伸びる

恵がそう考えた矢先

「ダメだよ」だって、凄く苦労したんでしょ？ずっと伸ばしてた髪切られたんでしょ？」

後ろのベツトからデンが言った

ニタニタと薄気味悪い

笑みを浮かべながら

「おねえさん、僕らね。天使と悪魔で商売してるの、ここは、恨みをもった人が来る、最後の砦って感じのところなの。」

深夜2時に鏡に血を付けて、恨みを口にすればここに繋がるんだ。
おねえさんは何でか来ちゃったみたいだけど…ま、別にいいでしょ？」

首を傾げながらデンは恵に聞いてきた。

デンが言つとエルが続けた

「来たお客様には私達どちらかの考えを買って頂きます。天使の私の考えを買えば、アナタは一生不幸にならない。その代わり、アナタは今まで通り過ごす。平凡な暮らしをしていただきます」

「悪魔の僕を考えを買えば、アナタの恨みをはらしてあげる。その代わり、アナタには不幸になってもらう。」

『どちらか選んでください』

天の声で恵は我に帰った。

「どちらかって…」

天使を選べば不幸にならない。

その代わり、今の生活は変わらない

毎日、隆之に怯えて過ごす事になる

悪魔を選べば恨みをはらせるが、不幸になる

恵は黙って目を閉じ、うつすらと口角をあげた。

ここまで読んで

吉川は自分の携帯が鳴っている事に気付いた

ディスプレイに表示された名前を見ると
後輩の名前があった

「どうした？」

「吉川さん！！今すぐ来てください！！」

電話の向こうではパトカーのサイレンと野次馬の声が聞こえてくる。

場所を聞くと近くだった為、現場に急いだ。

現場に着くと

マンションの前は騒然としていた。

マンションの中に入り、現場の部屋まで行った。
中に入った吉川は動きを止めた。

「吉川さん…どうしましょう」

後輩の塚田^{つかた}が涙声で訴えてきた。

塚田は涙を浮かべた目をしながらある方向を指差した
指さす方向を見ると

刑事や鑑識係が円を作っていた。

円の中を見ると、そこには、短すぎる髪型の女性が座っていた。

彼女は膝の上に発泡スチロールをのせて正座をしていた。

発泡スチロールの中には、わけのわからない小さな物が沢山はいつ
ていた。

吉川は発泡スチロールの中身を確かめようと彼女に近づいた

ある程度女性に近づくと、吉川は足を止めた。

吉川の頭の中にさっきまで読んでいた本の内容がよみがえった。

女性だが

男性のような短すぎる髪

「めぐみ…?」

吉川が呟くと

彼女は、ニタツと不気味に笑って見せた

「ねえ、可愛くなったでしょ?」

彼女が発泡スチロールを指差す

吉川は恐る恐る、彼女から目を離し、指差す发泡スチロールに目をやった。

「うわああっ!!」

叫び声をあげて吉川は後退りした。

塚田が涙をうかべ、刑事達が手出し出来ない理由がわかった。

发泡スチロールの中には

小さく切り刻まれた人間が入っていた

いや、正しくは詰め込んでいる。

と言った方が正解なのかもしれない。

まるでハサミで切ったように切り刻まれた死体。

目玉がこちらを見ていた。

彼女は肉片を掴み嬉しそうに話しを始めた。

「あのね、悪魔と契約したんだ…そしたら、朝これがあつたんだ。悪魔が不幸になるって言ってたけど…不幸ってなんだろうね？」

彼女はニタニタとまた発泡スチロールを見つめた。

恐らく、その発泡スチロールの中身は恋人だった隆之だろう…

恵は掴んでいた肉片を口に含んだ

その光景にその場にいた全員が目を疑った。

彼女はパクパクと口に隆之であつたであろう肉片を押し込んだ。

ある程度時間がたった頃

ようやく全員が冷静さを取り戻し

彼女は警察署に連行された。

吉川は急いで祖母の家に戻り小説を手にした。

小説の続きは先ほど起こった事がそのまま書かれていた。

「どうなってるんだ？」

吉川は困惑しながらも

小説を自宅に持ち帰った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8938t/>

デンエル、出口は西側にて

2011年10月8日22時48分発行